
バイオラ ～地獄の一週間～

目薬部隊隊長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオラ ～地獄の一週間～

【Nコード】

N8157V

【作者名】

目薬部隊隊長

【あらすじ】

ーあらすじー

西暦X年。12月のクリスマスが近くなってきた日、それは起こった。

とある、機密実験所で強力な細菌ウイルスが何者かの集団に奪取される。その集団は後に明悪党と名乗る。

明悪党は政府の最高幹部と機密の交渉を交わし、国家に加入し。明悪党の名前は全国に名乗る。この実験書での事件を手引きしたのは明悪党ということは人々は知らなかった。

この党は国民に有益な法律を次々と確立させ、支持率を急上昇させた。

しかし、支持をしているのは大人達だけであつた。子供達はこの党に不安を抱き、小規模な反政府デモを起こす者達も現れ出した。

ネット上の掲示板では、一種の洗脳ではないかと？という疑いも浮上し、大人と子供は険悪ムードの中、日々は流れていき、事は起こつてしまつた。

地獄の一週間（前書き）

携帯で書いていた、小説を新たに書き直そうと思い、これに至ります。何卒、素人の文章なので優しい目で、見てください。感動系を書いていたのですが、こういう、ホラーは初めてですが、頑張りますのでよろしくです!!

地獄の一週間

僕は生き残った。

最終日、僕は死ぬはずだった。

死の一週間を乗り越えるために、家族が友が。彼女が・・・僕の前で死んだ。

人の死を軽く見る、あいつらは僕は許さない。

復讐してやる・・・

ーあらすじー

西暦X年。12月のクリスマスが近くなってきた日、それは起こった。

とある、機密実験所で強力な細菌ウイルスが何者かの集団に奪取される。その集団は後に明悪党と名乗る。

明悪党は政府の最高幹部と機密の交渉を交わし、国家に加入し。明悪党の名前は全国に名乗る。この実験書での事件を手引きしたのは明悪党ということは人々は知らなかった。

この党は国民に有益な法律を次々と確立させ、支持率を急上昇させた。

しかし、支持をしているのは大人達だけであつた。子供達はこの党に不安を抱き、小規模な反政府デモを起こす者達も現れ出した。

ネット上の掲示板では、一種の洗脳ではないかと？という疑いも浮上し、大人と子供は陰悪ムードの中、日々は流れていき、事は起こってしまった。

―無音―

僕の名前は秋月隆あきしき たかし。この白木高校に通っている、高校三年生です。政治関連の大学に行こうかと検討中です。理由は今の国家がおかしいから。明悪党という派閥が出てきてから、今の日本はおかしくなっってしまったている。別に今ままで通りに平和な日常が続いているが、偽りの日常みたいな感じがする。まあ。これは子供からの意見ということだ。大人にこんなことを言っただけでは怒られてしまう。だから、家などでは政治の話は絶対しない。

「いつまで、寝てんだよ。もう、授業終わったぜー。」僕を起こしに来た、この下僕は桂直樹「かつら なおき」剣道部の主将で政治同好会という、奇妙なサークルにも所属している変わり者。体型はガツシリしているが、見た目はイケメン。女子にも何回もプロポーズされているが、全て断っているらしい。なんでも、家が禁じているとか・・・。

「なあ。このニューズみたか？」そう言うと、隆は持っていた、携帯を僕に見せてきた。そこには「野良犬、謎の変死体」と、書いていた。

「なんだこれ？新手のいじめで、ワンちゃん、いたぶったんか？」

「いや、俺じゃねー。なんでも、なんかの細菌に感染したらしい。見てみるよ、この顔。B級映画にでてくる、ゾンビ犬みたいだよな。」笑いながら冗談半分に僕に行ってきたが、正直。あまり、こういうのは好きじゃない。昔が動物が好きだから、動物虐待の記事などを見ると、虐待者に殺意が湧いてくる。

「ただの。病気じゃないのか・・・？」あまり、乗る気ではないので、話を早

く終わらせようとした。「うちのサークル連中から聞いたんだけど、明悪党が開発した、細菌ウイルスってのがあらしいんだけどさ。それが漏洩したんじゃないかって？皆、疑っている。」こんなイケメンが奇妙なサークルに参加しているのかは謎であるが、それはさておき。明悪党の名前がでると、少し興味がわく。

「その話、少し。興味あるな。話してよ。」

「ああー。い

いぜ。ここじゃなんだから。屋上いこうぜ！！後、昼食も取らなきゃな。」そういうと、直樹はカバンから弁当を取り出し、先に扉からでていった。

「あ。弁当。忘れた。」

「・・・」

―絶望の始まり

―屋上―

隆は購買で買った、焼きそばパンをムシャムシャと口にほづぼづつていた。

「さっきの話の続きだけどさ。そのウイルスって、量はそんなにないんだろ？別に心配くない？」

その質問に直樹は。

「いや。知ってるだろ？B級映画に出てくるゾンビとか？」

「ああ。噛み付かれたり、ゾンビになるって、あれか？」

そんなに映画とかに詳しくないが、一般常識としては知っている。

「そう。細菌がすくなくても、感染すりゃ。もう。そこらへん、ゾンビだけらになるぞ。」

「でもさー。そんな映画の世界じゃあるまいし。そんなこと、この平和な日本でおきないって。」

桂の言うことはほとんどがマジだ。でも、あまり、興味がない。

普通に考えて、起きる訳がない。

「でも、野良犬に感染したってことは、もうこの日本のどこかで発生してるってことだ。」

自身ありげに桂は言う。

「そんなの見間違えだろ。あるわけないって。」

「今にみてるよ。いずれ、地獄絵図に変わる。」

そういうのを見計らっていたかのように、チャイムの音が学校中に鳴り響く。

「次なんだっけ？」

「えっと。数学。」

隆は大の数学嫌い。たまにはサボリ。教師にも怒られることがあつてりもする。単位も正直言つと、危ないかもしれない・・・。

「今日は受けるよな？」

「いや。遠慮しとくは。お前の話聞いたら、なんか授業受ける気なくなつた。」

そついうと隆は床にゴロリと寝転んで、スヤスヤと寝始めた。

「ったく。留年なつてもしんねーぞ。」

桂は屋上を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8157v/>

バイオラ ~地獄の一週間~

2011年10月9日15時02分発行